

さいたま
見沼

よみさんぽ

2019

Vol. 30

食べる・つくる 2

自然との調和から作物を生み出す

固定種・自家採種にこだわった
自然栽培への挑戦

記録写真家 柿内未央

自然との調和から作物を生み出す

固定種・自家採種にこだわった自然栽培への挑戦

宗野 政美

(やどかり農園)

はじめに

やどかりの里は、精神障害のある人たちの地域生活を支える団体です。やどかりの里には、病気になり人生のどん底を体験したメンバーがたくさんいます。彼らが居場所を得、自らの人生を再び生き直す姿に、競争社会や経済的価値では測れない「もう1つの価値」の存在を見出しました。そこには、ありのままを認め合い、共に生きようとする結び合いの精神があります。

その「もう1つの価値」をヒントに、世代や分野を越え、人と人とのつながり、人と自然との関係を通して、「生きていて良かった」と誰もが思える社会を創ることが、今の私たちの目標です。

やどかりの里が取り組む「自然栽培」

やどかりの里では、2014年から「農のある豊かな暮らしとご縁づくり」をテーマに、障害のある人たちと農業にチャレンジしています。耕作放棄地や荒地の開墾から始め、今では約5反の農地で固定種野菜を自然栽培で育てています。去年は年間を通して32品目39品種の作物を栽培しました。

自然栽培は、一切の肥料、農薬は使用しません。自然の力を最大限に活かしながら、作物が成長しやすい環境を整えることに尽力します。自然環境に負荷を与えることのない持続性の高い農業方式といわれています。

自然栽培を知る前は、ビニールハウスを使ったトマトの養液栽培の導入を検討し、そのシステムを学びました。ICT（情報通信技術）を活用した次世代型の農業として期待を寄せましたが、電気や石油エネルギーの消費と、化学肥料や人工培地などの農業資材に頼りながら、効率よく、合理的に野菜を「作る」農業に大きな違和感を覚えました。

種を守り継ぐ

現在国内で使われているほとんどの野菜の種は、一代交配種（F1）といわれる種です。発芽や生育が均一で形の揃いが良いので、大量生産、大量流通に適しています。また、病害に対する耐病性も品種改良されているので、特定の病気や農薬に強いという特徴があります。また、F1は農薬と化学肥料を使うことを前提につくられていて、自家採種では同じ性質をもった種は採れません。



一方、在来種といわれる日本の気候風土に馴染んだ伝来種（固定種）は、作物本来の形や味を持ち、風味、香りも豊かです。しかし、病気に弱かったり、生育が不均一で形や大きさが揃わないことから、一般流通に乗せにくいという特徴があります。

また、固定種は自家採種が可能で、その土地で育った作物の種採りを5年、10年と根気よく続け、栽培していくと、その土地に適応した種となっていきます。

現代農業の主流ではない固定種の扱いは、畑で種を採るまで育てるという多くの時間と、交配しないよう工夫しながら種を残していくという手間を要します。しかしながら、この種を守り継ぐ「いのちのリレー」こそが、経済的合理性を優先しない、人と自然、歴史・文化と調和する「もう1つの価値」だと考えています。

土にいのちが宿る

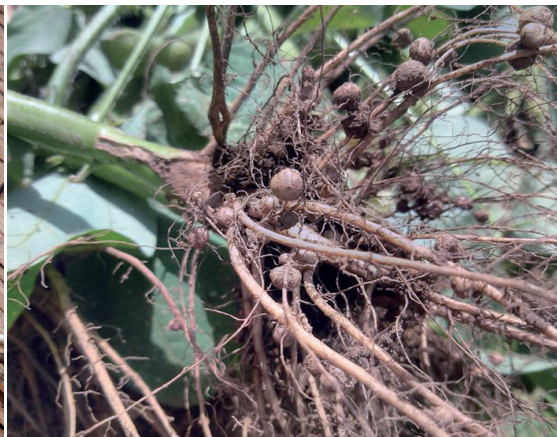
作物にとって理想的な土の状態は、水はけがよく、水持ちがいい、そして空気が通るふかふかの土です。単に、土を耕せばいいというわけではありません。自然栽培では、イネ科やマメ科を中心にキク科やアブラナ科の作物を土の状態を見極めながら栽培します。

マメ科の植物と共生する根粒菌という土壌微生物は、空気中の窒素を取り込んで窒素化合物をつくり、土壌を肥やしてくれます。窒素は、葉や茎を大きくするために必要な養分なのです。

また、背の高いイネ科の植物は根を縦に伸ばすことで、水の浸透が悪くなる土の中の硬い層（硬盤層）をほぐしてくれます。

植物が持つ特性を活かし、土の構成と土の中でしっかりと微生物が働ける状態をつくることができれば、肥料を施さなくても作物は育つと自然栽培では考えています。

自然の土は、植物の残渣や虫の死骸、排泄物などの有機物が、土中の微生物によって分解・再合成されたものです。生き物の死骸が分解され、土に積み重なっていくことで、土は豊かになり、次のいのちがそこで育まれていきます。



いのちを循環させる「生命活動」として

自然栽培に取り組む農家との出会いが、私たちと自然栽培をつなげてくれました。自然栽培を学んでいく中で、農業は単なる作物の「生産活動」ではなく、限りあるいのちを循環させる「生命活動」だと感じるようになりました。

自然栽培の世界観は、自然の中には無駄なものが1つもなく、すべてが互いに結びついているものとして、すべての生物の多様性に価値を置いています。自然の生態系の循環を身近に感じることで、人間も自然の中に生かされている存在であり、すべてのいのちが積み重なっていることを学んでいきます。これは、障害のある人もない人も、誰もが社会の中で唯一無二の大切な存在であるという、やどかりの里の理念に通ずる考えです。

やどかり農園の取り組みは、5年あまりの活動ですが、自然栽培の実践を通して多くの人とつながり、「自然と共にある」ことの豊かさを感じています。この豊かさへの共感が、「ありのままを認め合い共に生きようとする社会」につながることを願いつつ、これからも活動していきたいと思えます。

(記 宗野 政美)

2頁, 6頁写真提供 柿内未央



土とともに 1



『生きるぼくら』
原田マハ著
徳間書店 2012年

『野分けのあとに』
和田真希著
産業編集センター 2016年

並木せつ子

最近テレビなどで新規就農する人の話をよく聞きます。だからでしょうか。都会を離れ、農業に取り組む若者を主人公にした小説を見かけるようになりました。今号と次号、2回にわたり、そんな小説をご紹介します。

『生きるぼくら』の主人公・麻生人生は24歳、ひきこもり歴4年。小学生のとき両親は離婚し、東京のアパートで母と二人暮らしです。頼みにしていた母が、ある日突然、数枚の年賀状を残して姿を消してしまいました。年賀状の中に、父方の祖母の名まえをみつけた人生は、住所だけをよすがに子どもの頃行った「おばあちゃんの家」を訪ねます。その家には中村つぼみという若い女の子がいました。それは父の再婚相手の娘で、父は昨年亡くなっていたのです。おばあちゃんはずっと一人で「不耕起、無肥料、無農薬、害虫も駆除しない」という「自然に近い田んぼ」でお米を作ってきましたが、今は認知症になっていました。人生はここを生活の場と定め、おばあちゃんの代わりに米作りをしようと決意します。

『野分けのあとに』専門学校を卒業して東京の小さな出版社に勤めていた絵梨は、摂食障害のため3年ほどで退社。家庭菜園を始めようと、実家のある小田原の郊外で一人住まいを始めました。そんなとき地元のミニコミ紙で、無人となった山奥の集落・北杉で自給自足生活を実践する若者の記事を見つけます。農業初心者の絵梨は野菜の作り方を教えてもらうため、北杉の若者——慶太を訪ねます。慶太も農家の出身ではありませんが、荒れてしまった田畑を耕し一人で農業をしていました。慶太の作業を手伝ううち絵梨は食べることに向き合えるようになり、やがて二人の間に悠太という男の子が生まれます。農薬を使わずに野菜を育て米作りをする二人と、それを応援する集落の元住民たちの間にはいつしか信頼の輪ができ、絵梨の心にも北杉で生きるという確かな覚悟が芽生えます。

あの街 この街 俊一郎が行く・24

セイナツツァロの食卓の風景

巨匠をめぐる旅

「もう少し普通にならないのですか」保育園の新築に向けて最初の案を提案すると、行政担当者からの厳しい言葉が会議室に響きました。どうやら中庭を囲むように設けた渡り廊下が無駄な空間に見えたようです。心の中で、「変わったことがしたいわけじゃない。要求に対して、周りが密集しすぎているんだ」と叫びますが、場の雰囲気言葉に飲み込みます。しばらく考え、複数案見てもらうことにして、その日は引き下がりました。

フィンランドの巨匠、アルヴァ・アアルトの作品を見て回りたいと思ったのは、そんな仕事を抱えていた時期でした。運よく保育園を設計する機会を得、必死に保育園について勉強していました。手にしていた本でフィンランドの保育園の事例を見ていたら、高校生の頃に見かけた建物のことを思い出しました。

アアルトの生活様式

20世紀のフィンランドで、名のある建築のほとんどを手がけた巨匠の作品は、中世から近代に至る使用人を前提とした格式ばったお城のような富裕層の住宅を、家族単位で快適に暮らせる機能的なものに置き換えました。しかし、実際の建物は便利な家事動線の計画や建物の作りの合理性だけではなく、家族間の適度な関わり合いをつくり出し、庭など外の風景を生活環境に取り込み、空間を加飾ではなく、構成や調和で楽しませてくれるような作品たちでした。

夢見た空間

高校生の頃、進路を決めるきっかけになった本に、そのアアルトが設計した結核療養所（後に総合病院となる）が紹介されていました。私は現地の役所に申し込み、役所の担当者の案内で見学は行われました。当時、病院の設計経験

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）



がないままコンペで勝ち取った建築家は、その未経験の部分を補うように、患者にとっての居心地の良さを徹底的に考えて建物を設計しました。ベッドに寝たままでも窓の外に視線が届くように設けられた病室の窓、安全に配慮したドアノブなど、細部の1つ1つが本で読んだままの説得力を持っていました。

ダイニングの借景

本では白黒の写真で紹介されていた建物。実物を見て感心したのは色彩でした。有名な大気浴をするためのテラスを過ぎ、見学の終盤に訪れた食堂は、大きな窓から建物の周りを囲む緑の借景と日よけのテントの色の柔らかな写り込みが入る空間。当時は外出を制限されていたかもしれませんが、日々変化する絵画のようなこの景色を、患者たちはどんな気持ちで眺めていたのでしょうか。



村役場の部屋で

旅行中、数日はセイナツツァロにあるアアルトが設計した村役場の公営住宅部分を使った宿泊室に泊まりました。部屋の中は、アアルトに由来のあるテキスタイルや家具が使われていて、管理者の建物への愛着が感じられます。窓越しに見える中庭やそれを囲む渡り廊下の造形は、毎朝見ても飽きませんでした。ギャラリーを兼ねた廊下は、ゆったりとした幅になっていて、中庭の景色を取り込んだ雰囲気の良いフリースペースとなっています。

旅行後、計画している保育園の渡り廊下の幅を倍に広げて再提案しました。懲りない態度に飽きられつつ、案は採用されました。その渡り廊下は、子どもたちの雨の日の遊び場になったと喜んでもらっています。

「安心して地域で暮らし続けたい」 という思いの実現に向けて2

あおぞらハウス、始動しました

本誌 vol.27 にてお伝えしたグループホーム「あおぞらハウス」が竣工し、いよいよ入居者を迎えて暮らしの場としてのスタートを切りました。

あおぞらハウス建設までの道のり

2017年4月、やどかりの里としてグループホームを初めて建設するにあたり、準備委員会を立ち上げました。同年7月に2018年度事業として国庫補助申請を行い、設計士さんと一緒に自前のグループホームを建てる上で、何を大切に、どのようなグループホームにしていくかという検討を重ねました。2018年7月に国庫補助の内示があり、8月に建設業者の入札、地鎮祭を経て9月着工。およそ半年間の工期を経て、2019年3月、たくさんの人たちの協力を得ながら初めて作ったグループホームが完成しました。



コンパクトながら機能的な、居間との対面キッチン。



正面玄関へのスロープ

完成した建物はまっさらの状態なので、共用部分に必要な家電・家具類を設置し、カーテンの取り付けなど慌ただしく準備を進めたのちに、まずは2名の入居者が真新しい建物にやって来ました。入居からしばらく経った5月末、写真を撮りにお邪魔したところ、2人とも「とても住み心地が良いです」と笑顔で語ってくれました。

ゆるやかなつながりのある暮らし

あおぞらハウスには、7つの個室と共用のキッ

チン・リビング・お風呂・トイレがあります。リビングは廊下と一体となった開放的な作りで、明り取り窓のある天井は高く、壁は木目を基調とした温かみのある空間です。大きな窓のカーテンを開ければ、外には地域の人たちが行き交う姿を見ることができ、住む人も外を通る人も、お互いの暮らしをなんとなく感じ取ることができます。

個室に入ると、グレーと白の壁紙が落ち着いた雰囲気、自分だけのスペースです。誰にも邪魔されずにゆったりとくつろぎつつも、部屋のドアの向こうには他の人の気配を感じることができます。

現在入居中の2人は、以前からあおぞらハウスの近くで生活していましたが、加齢や体調の不安を抱える中で、单身生活が難しくなってきたために、あおぞらハウスへの入居を決められました。以前の生活と、まったく切り離されてしまうのではなく、同じスーパーやコンビニへ買物に行き、同じデイサービスに通っています。そして、同じ地域に暮らす人たちと、お互い顔の見える生活が始まっています。「安心して地域で暮らし続けたい」という思いは、こうした地域の人たちとのゆるやかなつながりの中で実現できていくものなのではないかと感じます。

(記 日野 陽子)



晴れた日には明るい日差しが差し込み、ゆったりとした時間が流れます。みんなでくつろげるリビングになりました。

自由に地域で暮らし 続けたい

辰村 泰治さん



今回は、あおぞらハウスで暮らし始めた辰村泰治さんをご紹介します。現在 82 歳の辰村さんは、62 歳の頃、市内の精神科病院で約 22 年間の入院生活を経て、やどかりの里のグループホームに退院してきました。退院後は、地域の配食サービスを行うエンジュ（見沼区南中野）で働き、また、精神障害の体験を語る講師の仕事にも精力的に取り組み「地域で自分らしく暮らせることの喜びや大切さ」を伝えてきました。

22 年間の長期入院を経て

辰村さんは、1937 年に満州で生まれ、8 歳の頃終戦を迎え、北陸の母親の実家に身を寄せました。読書が大好きな少年でした。東京の大学に進学しましたが、22 歳の頃統合失調症を発症。その後、3 回の入退院を経て、10 年程働きながら暮らしましたが、39 歳の頃胃潰瘍で倒れ、救急搬送された先は精神科病院でした。

手術も終え、精神的にも安定して元気になった辰村さんは「退院したい」と医師に訴えました。医師からは「雇ってくれる人もいないし、アパートも貸してくれないよ」などと言われ、退院を諦めざるを得ませんでした。その後は、看護師から院内の厨房の仕事を頼まれ、ボランティアで毎日働き続けました。このまま歳をとって病院で死ぬのだろうと覚悟を決めていましたが、病院のケースワーカーに「80 歳までのあと 20 年間、この病院で暮らすのがよいか、それとも退院して、自分の自由な生活をしてみたいとは思いませんか」と問われ、退院を決断したそうです。

平和であるからこそ

退院後は「今が一番幸せ」とグループホームでの暮らしを謳歌してきました。しかし、81 歳になり、加齢と共に様々な疲労が蓄積して体調を崩し、入院となりました。退院に向け、

あおぞらハウスへの入居を提案され、ひとり暮らしの大変さを感じていたこともあり、入居を決めました。

あおぞらハウスでの生活は、快適でゆったりと過ごせているそうです。これまでは家事など全てを自分で行いましたが、いつも何を食べようか悩み、食事の準備が大変だったそうです。現在はあおぞらハウスで提供される食事が大変おいしく、気が楽になったと話されます。戦後の食糧難の大変苦しい経験もされており、当時はバナナも高く、大人になったらバナナをお腹いっぱい食べたいという夢を持っていたそうです。自由に売り買いができるのは、他国と仲良くし、貿易ができているからで、この豊かな生活を続けていくためには、絶対に戦争をしてはならないと平和への思いを語ってくれました。

自由に、あるがままに

辰村さんは「自由がいいです。縛られるのが嫌なんです」と言います。好きな時に新聞を買いに出かけたり、

のんびり読書したり、お気に入りのデイサービスに通えることも嬉しいと話されます。近所のコンビニエンスストアでは、店員さんが「お久しぶりです」と声をかけ、購入した商品を慣れた手つきでリュックサックに詰めてくれていました。辰村さんがこの地域で創ってきたつながりのひとつであることが感じられます。

これからの生活については「老人ホームにだけは行きたくないですね。私は死ぬまでここにいたいです」と力強く語られました。

辰村さんが、時代に翻弄されながらたどり着いた地域での生活。日常のささやかな自由に大きな喜びを感じていることが伝わり、自由で自分らしい暮らしを送れることの価値の大きさを改めて教えてもらったように思います。年齢を重ねても障害があっても、自分らしい生き方を全うできる地域に向けて、辰村さんの再出発と共に、歩みを進めていきたいと思います。（記 鈴木 裕貴）

辰村泰治の七十年

時代の波にほんろうされた一人の精神障害者

辰村泰治著
2007 年 8 月 やどかり出版 174 頁
本体 1,800 円 + 税 ISBN978-4-946498-95-4 C0036



あなたらしい毎日を。

さいたま市内を中心にビルやマンションを管理する会社です。
ご自身のライフスタイルにあった時間でのお仕事があります。

清掃スタッフ募集中!



今日も 明日も ずっと。
毎日興業株式会社

〒330-0842 埼玉県さいたま市大宮区浅間町2-244-1
TEL 0120-156365 (フリーダイヤル)

「もったいない」をつなぐ&「モノづくり」でつながる



公益社団法人やどかりの里 **すてあーず**
〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 844-22 TEL : 048-688-8223

こころの悩み、ちょっと話してみませんか?

お住いの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい。

見沼区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-682-1101
大宮区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-795-4720
浦和区障害者生活支援センターやどかり 電話 048-793-6373

***精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です。**

新刊のご案内 やどかりブックレット

障害者からのメッセージ・25

統合失調症を生き抜いた人生

『70歳を目前にして今、新たな一歩を』増補版

堀 澄清著 2019年3月1日発行 900円+税



やどかり出版 さいたま市見沼区染谷 1177-4 TEL 048-680-1891 FAX 048-680-1894

1食からお届けします! (月~金)

おかゆや
刻み食対応



ご希望の
曜日にお届け

管理栄養士が献立をたて、栄養バランスのとれた食事
昼食 550円/1食

受付 月~金(祝日のぞく) 8:30~18:00 エンジュ
電話 048-686-7875 見沼区南中野 286-1

無肥料・自然栽培
ほしいも
農業・肥料・除草剤不使用

やどかり農園(公益社団法人やどかりの里)
さいたま市見沼区染谷 1177-4 やどかり情報館
Tel 048-680-1891 fax 048-680-1894

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために
こうぬまふくしかい

社会福祉法人 **鴻沼福祉会**

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



い ち ず
とうふ屋 **一豆**

TEL 048-854-8000
FAX 048-854-3538
さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりこだわった本格とうふ。
宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。
大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910
FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。(一部商品を除く)
この道30年の職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちず

TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145



そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。
野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいて女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉会では、貸詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを求めて新しい仕事にもチャレンジしつつあります。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています! 問い合わせ先: 048-854-6890

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL: 048-854-6890 FAX: 048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)
●さいたま障害者労働センター(橘川市)

《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ

●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区) ●ひかりホーム(西区)

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)

●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

さいたま見沼よみさんぽ

作者紹介

記録写真家 柿内未央さん(表紙写真)

“人としていかに生きるか”について考えるなかで、平和の基盤は自然との共生にあると痛感し、埼玉県の名石農園にて自然栽培を学ぶ。

生かされていること、全ての本質が等しくつながり合っていることを感受してから世界が変わり、その一部として生きたいと思うように。

自然とヒト・人と人をむすぶお手伝いがしたく、“自然とヒト”…いのちの記録をメインに活動している。

ホームページ <http://tomomusubi.com/>

食べる・つくるに寄せて

全てのはじまりは、小さなタネから。
植物も、それを食べる動物も、まずタネがなければいのちは繋がらない。
タネは、まんまいのち。

大根1本から採れるタネは5,000粒。
単純計算して、そのタネから育った5,000本の大根からは、25,000,000粒のタネが採れる。25,000,000粒のタネからは…

私たちを“依存のしくみ”から離してもくれるタネ。タネさえあれば、あとは自然が育んでくれる。

土・太陽・水、微生物や他の生きものたち…

タネはいのち、わたしたち。

みんなでまもり繋いでいきたい たちからの。

(柿内未央)

さいたま見沼よみさんぽ 第30号

発行 2019年8月

編集 「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷1177-4

Tel 048-680-1891

Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<https://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 土橋敏孝

印刷所 やどかり印刷

前号に続き、「食」に関するお話をお届けします。

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただけてきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。

またこの度、広く地域情報をお届けするため「さいたま見沼よみさんぽ」と改題致しました。

「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員一同